［シンポジウムⅠ］

東欧文学の多言語的トポス：
複数言語使用地域の創作をめぐる求心力と遠心力

井上　暁子

2018 年 10 月 6 日、東京大学本郷キャンパスにてシンポジウム「東欧文学の多言語的トポス――複数言語使用地域の創作をめぐる求心力と遠心力」が開催された。本シンポジウムの企画は、言語文化を特定の地域の風土や歴史によって規定することが難しい現代世界において、あえて「東欧」に着眼し、当該地域の多言語使用状況を背景とする様々な緊張状態を分析し、既成の思考の枠組みを相対化しようとする意識を出発点としていた。ちなみに、ここで「言語文化」というのは、言語による文化活動全般をさす。

もとより「東欧」とは、冷戦という特殊な条件の下で用いられた歴史的地政学的呼称である。本シンポジウムでは時代や地理に制約を設けるためにではなく、西（オーストリア、ドイツなど）と東（ロシア、中国など）の両方からこの地域に注がれてきたコロニアルなまなざしや、この地域が晒されてきた政治文化の力学を念頭に置きながら、当該地域の「文化的ダイナミクス」を論じるために用いた。

「多言語性」は、東欧の指標としてよく耳にする言葉であるが、本シンポジウムが想定した「東欧の多言語性」は、「独立した民族・言語・文化が複数存在する」という意味での「多元性」とは本質的に異なる。東欧の言語文化は、（個人による）複数言語使用、ユダヤ系のネットワーク、西欧やロシアの思想および芸術運動との連携等の中で、様々なズレを抱え込みながら発展してきた。

民族、文化、言語の差異を幾重にも抱え込んだこの地域の言語文化は、地域内の多言語状況ないし言語的多様性を反映するだけでなく、東欧と周辺地域との関係、つまり「横のつながり」へ開くことによって説明されうるのではないか――本シンポジウムは、こうした仮説をたて、東欧言語文化の多中心性、あるいは、脱中心性ともいうべき特徴を、言語・文化・民族で分断することなく、可能な限り立体的に、「動態」として描き出そうと試みた。「横のつながり」が重なり合い、ズレが生じた場所では、西欧と東欧、国と地域、標準語と方言の間の価値序列の転覆が起こりうるかもしれない、という予想もあった。いずれにしても、複数の次元で引き起こされる東欧の「文化的ダイナミクス」において、言語がどのような働きをしているのかが、共通の関心事であった。

検証にあたって、報告者が可能な範囲で共有しようとしたのは、「求心力」と「遠

心力」というキーワードだった。「求心力」は、文学史記述や少数言語の規範化のような、多様で異質なものをまとめていく運動のことであり、「遠心力」は、そこから逃れていく運動や、既成の概念では捉えられない動き、たとえば、翻訳や流通、それに伴うイメージの変容、地域同士を結ぶネットワークなどを想定した。

そもそも言語文化の交錯する東欧では、中心や周縁も単一化したり固定化したりできるものではない。中心は常に複数に、周縁は新たな中心に変化する可能性を秘めており、「求心力」と「遠心力」という運動のベクトルは頻繁に入れ替わり、交錯することが予想された。

冷戦終結からおよそ 30 年が経った今日、世界各地で右翼政党が台頭し、欧州では中東、アフリカからの移民流入を背景に、ナショナリズムが高まっている。今日の東欧には、20 世紀初頭、急速に進んだ国民統合の中で生じた様々なずれや不協和音の残余も垣間見える。

危機的な状況下にある地域社会が理想としてまず目指すのは、「独立した民族・言語・文化が複数存在する」という意味での多元性かもしれない。しかし、「横のつながり」に目を向け、地域を外に開いていかなければ、排他主義に陥る危険性は消えない。本シンポジウムは 20 世紀の東欧の事例に限定されてはいたものの、様々なレベルで東欧内外を結ぶ「横のつながり」を検証し、「中心／周縁」という二項対立を乗り越える可能性を模索した。

シンポジウムの概要

シンポジウムの報告は、日本学術振興会科研費プロジェクト基盤（B）「東欧文学の多言語的トポスをめぐる研究」（課題番号 15H03193、平成 27-30 年度）のメンバー 6 名と、東欧のドイツ語ドイツ文学研究者 2 名によって行われた。スラヴ語圏とドイツ語圏の研究者が共同で行う文学関連のシンポジウムというのは国内でも珍しく、本企画の実現に、共同研究「〈シレジア〉の文学史記述に関する総合的研究」〔平成 29 年度「スラヴ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」採択、代表：阿部賢一〕が大きく貢献していることは強調しておきたい。

シンポジウムは、三つの部から構成された。「規範（カノン）の形成」と題された第 I 部では阿部賢一氏による「ボヘミアにおける文学史の系譜――フェリクス・ヴォジチカの「文学史」理論をめぐって」と、三谷研爾氏による「ボヘミアにおけるドイツ語文学史記述」の報告が行われた。コメンテーターは、ロシア文学研究者の楯岡求美氏が務めた。第 II 部「辺境地域における文化活動」で行われた報告は、藤田恭子氏の「〈周縁〉と〈カノン〉――ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちとゲーテ」、小椋彩氏の「ワルシャワの亡命ロシア」、野町素己氏の「分裂と統合のディレンマ：カシュブ文学の事例より」であった。コメンテーターは、ベルギー、スロヴェニア、オース

トリアの美術・文学の研究者である三田順氏が務めた。第Ⅲ部「流通するイメージ・概念・ことば」では、井上暁子が「シレジアのイメージの変容――ポーランド語圏を中心に」、越野剛氏が「ベラルーシと極東における中国イメージの比較」、加藤有子氏が「1930 年代のポーランドのユダヤ系前衛作家の共通言語／普遍言語の探求――デボラ・フォーゲルとブルーノ・シュルツ」という報告を行った。コメンテーターは、ロシア文学研究者の安達大輔氏が務めた。

時代、言語、作家、地域、歴史的事象などの共通項を設けることなく行われたシンポジウムであったため、共通の結論を目ざすというよりは、多様なアプローチの探求にとどまった。しかし、各事例において、多言語性は「横のつながり」を活性化し、東欧を外に開く「触媒」のような役割を果たしていたと言えるだろう。

結び

本シンポジウムの報告は、修正・加筆を加えたかたちで、2020 年 3 月、論集『東欧文学の多言語的トポス――その求心力と遠心力』として水声社より出版される。論集のまえがきは、本テキストを下じきにしている。諸般の事情でシンポジウムの報告者全員の寄稿は叶わなかったが、日本における今後の東欧文学研究の布石として、手に取っていただければ幸いである。